

# 名家連ニュース

平成30年5月25日(金)  
発行：特定非営利活動法人  
名古屋市精神障害者家族会連合会  
会長 堀田 明  
TEL/FAX (052) 846-5576 NO. 525号

## 精神医学の祖に学ぶ 呉秀三の業績伝える記録映画

### 100年前、処遇改革「家庭内監禁」批判

日本の精神医学・医療の祖といわれる医師、呉秀三（1865～1932年）の業績を伝えるドキュメンタリー映画の製作が大詰めを迎えている。

呉は精神障害者を自宅のうちに閉じ込める「私宅監置」を批判し、精神医療の改善を進めたが、撮影中には障害者の家庭内監禁事件が相次いで発覚した。

製作スタッフは今年完成する映画を通じ「呉が100年前に問いかけたことを改めて考えてほしい」と訴える。（毎日新聞ニュース）



### 精神障害者の監禁 家族追い込まぬ社会に

近代日本の精神医学の基礎を築いた呉秀三が、私宅の座敷牢（ざしきろう）に閉じ込められた精神障害者の悲惨さを告発したのは1918年。病気に加え、国の無為無策という「二重の不幸」に苦しめられていると痛烈に批判した。それからちょうど百年。いまだに往時を連想させる事件が表面化する現実に愕然（がくぜん）とさせられる。

去る1月に兵庫県三田市で、精神疾患のある42歳の男性が自宅の檻（おり）の中に閉じ込められているのが見つかり、先週、父親が逮捕された。監禁はおよそ25年に及ぶ疑いがあるという。

昨年12月には大阪府寝屋川市で、統合失調症と診断されていた33歳の女性が自宅の小部屋で衰弱の末に凍死した。両親は監禁と保護責任者遺棄致死の罪に問われている。およそ20年間閉じ込めていたとの見方がある。

三田事件の父親は20年以上前に三田市に相談していた。男性は障害者手帳を持っていた。寝屋川事件の両親は2001年に女性を受診させていた。それを元に障害年金を受け取ってもいた。

福祉であれ、医療であれ、接点はあった。にもかかわらず、なぜ途切れてしまったのか。

精神障害のある人の家族でつくる全国精神保健福祉会連合会の最新の調査では、信頼して相談できる専門家は「いない」との答えがほぼ3分の1に上っている。

暴れたり、叫んだりする症状に困り果て、近隣とのトラブルも心配する家族は多い。二つの事件の親もそう感じていたらしい。手を差し伸べるべき側の待ちの姿勢が、結果として家族の不信と諦めを招いていないか。地域の差別的なまなざしが、家族を孤立させてしまう面もあるだろう。

気分障害や統合失調症、認知症といった精神疾患のある人は増える傾向にある。すでに4年前に392万人を上回っている。インターネットに依存したゲーム障害も問題化している。

患者と家族だけに負担と責任を押し付けるような仕組みでは、座敷牢事件は後を絶たないだろう。

支え合う社会へ向けて、例えば義務教育段階から病気の正しい知識と対処法を学ぶべきだ。そうしてこそ精神障害者への偏見、差別の解消にもつながるに違いない。（東京新聞2018年4月14日社説）